

和歌

あはれ歌抄

家隆口傳  
近來凡抄

六

伊地知文庫

文庫20

324

6

60

55

50

45

40



和評口傳等

伊地知氏書冊



史和舟と名同を家とに評ういかに人々乃  
をいぬか不ゆらしくおろそこといふを念して  
是亦乃に評うは過角く次此集ハ秘秘也  
何れにこそ源を契りてあきつれん人よりか  
ゆり次庵うすけの唯文一人なりか  
若れりし勢にすふ事一何れをあらく言は  
真感よ書人よとのあり

一歌仙

舟仙といひ此みらに長き舟人といふをいふ

舟仙



その教を志す一しつ庵とて先和年とて以て  
故に安んずる一

人丸 赤人 葉平 小町 猿丸大丈

あまも也ふ地とつふあはつとを指化するに  
よしてあり又和年乃他誠とて中する恒者  
大の種とてしるるあり

一心所詮

年一は花鳥風月より節事詠に必ずしをよ  
り人家を詮一かといふ庵一ありて佛法に  
通るるを好む一ありて化をのつてはる事

いふ者もあまは一とらに年乃取詮とてよ  
まも也出假利生まらる役世俗の假名をまうけて  
をらるるをいふ年乃釈をあふ不却て親法  
利生一も法とて必に法とて主國の風俗を  
初めよく佛法は實儀とて宣所は漢去一り  
文類をもも人のいふをけけは法弘通乃  
方便や一我邦よハ三十一ま乃初を以て人の  
いふや一けけは法乃妙あり一いふをけけ一  
あまもは年乃佛法の大なるあり一此  
いふや年を稱するまもこのあり











又 五惜 七流 五曲 七絶 七題

せつ婦の情をみせぬとく

<sup>惜</sup> 去る雲は流 <sup>流</sup> ぬらうらう <sup>曲</sup> ごとく

<sup>化</sup> 今す人らむか <sup>化</sup> 秋をよか

又如法師の情は序祈腰偏流也

とへるの序は假令花伝縁をらに音節

山紅葉と縁すか祈ははとと月もそを

乃事とあは上乃句の流乃か下乃句れ

と一先乃七と伝まはくよせとちり偏と

題の介事をさ乃とすす題とあはら

よせとちり流は句とに云あつ勢と云也  
但又題伝あふとけくよりか弁をあらわ  
一極とぬらう愈々す云忠弁に

このをりちんせも法あはしむら

去乃と云とちり 初きよ先す初

此弁は高花伝ふみふとと世の初りか  
あきらかろくよせとあはあすすをの  
けくかやうの祈とちり也但又題よちりか  
ぬらうとちり愈々一是ら伝取又三曲  
やうの半を味句教句正句と云味句と



為しつらうに物のまじりも利乃縁よきうひて  
さうじうふみち中をたふく

縁乃くさ山の中りたふさうり尾たふ

わうくくく日まふらみつ海うね

縁乃く山鳥さうらに物まじりもたふくく

白ゆき云利乃縁よきあじ悪き

まふぬゆきあふ乃山流さうり乃らと

あふから海のりもわおふさ

無くはえぬのまうさにあなまじりか  
いんふりし親白とはあめうら縁さる利乃

まじり縁もまのりうらまの海と縁乃ま

せりうく一梅さうらまのり、海乃海

うさなま人をわあさうらと

あま海乃まうく一正白くはすあくとし

あま海くくくくくか海と一海海

まのりく一海海まじり木のまのり

まのりく一海海まじり木のまのり

是海なり海一又秀白乃舟碇云海れ

前揚舟くくくくくく秀白く

木乃海くくく花乃海乃の海



ゆらやうんをゆらやうん

是神のり壁云乃并ん

うすきくかき玉つしん

かきりかうんれかりう

是神也為揚乎は白く小對して

處しん

まはゆえ杖をさうけかゆい

かきみしきりともありと

又白紙かうん

まぬらうやとあり

杖をさうん

ま小杖と為し後よ

身は春の梅と對し

一處小亭と為し又上下

知しゆはむ先一の

たしん

杖をさうん

まらう月けらう

是神なり一連并は此

又詩の知ゆもてみ



二小膏逸三丁一皎潔曰小沖淡五小藤藤三妙  
也乃其たうくささく此神也

かき此かまきりやいのこ文志との

雲井に志海ふもひのけし

此丹飯入るる事起くかこらうくたこ

ゆいふ事たもてと男ふとりく一期の秀

逸あり定家こえりへかゆへよらうらまゆ

入ゆり膏逸あゆくさくこつげいりゆり神也

ゆきはまこ杖乃あつんもさぬ庵

こゆく月ちたれしきぢみは

是れ定家乃一期の秀逸皎潔といふらきて  
よはまきとを切あつくまゆも杖を棄すとい  
えんかゆ神たり

こやうの家月ありおつれ神ちるぬ乃

云は杖の長新と屋戸折し

意法和尚と此神とこりみく海をくさるる

沖淡といふこし長好く神也妙肉侍乃

神

とまゝるよ神はまきしにららるるぬ

わつららるるぬあまこもつはか



是神也藻藤とほりあり一とつと乃ゆ  
あり神なりあまこころ心内と乃結神成へ

きねのまゝとゆふにまゝのしりあやめま

まゝあり、厚とまゝと一とつちい

是神あり一又口ふと云事あり一ふ芝茶を  
ゆふ取前乃まゆ妙と膏造同神成魚一まゆ松  
病枝伸潔と皎潔と二と倭ゆり神なり三  
晴石千仍と云藻藤乃神あり一四小賢早  
同笑とほまるとつ厚一と厚とまゆをゆふと  
神なり

已上

凡哥乃名おほしとゆふと是赤たの傳  
とるつと次位六義乃事ハ各別めと此系乃  
限とありつと病ハ病未乃事かハ大と人この  
ゆふとゆふと一とゆふと一と委注すゆふとゆふと  
ゆふとゆふと一とゆふと一と人たゆふとゆふと  
ゆふとゆふとゆふとゆふとゆふとゆふと  
ゆふとゆふとゆふとゆふとゆふとゆふと

和詩口傳

檀中ゆふと友系家隆卿也















































又差ああろー

一子まの乳きまをこいひもあろろりら

こはれ差ああろーこいひもあろろりら

きんり

一箱取してまの乳はよしのあまのり

こいひ他ろまのりこいひ他ろまのり

ろり他ろあまのりこいひもあろろりら

あろろり

一箱取はけのりこいひもあろろりら

あろろり一箱取はけのりこいひもあろろりら

名あまのりこいひもあろろりら  
あろろりこいひもあろろりら

一子入痛の同心の痛と才と才四乃終乃

まよと休痛一こいひもあろろりら

ろり一あろろりら一箱取はけのり

あろろりら一箱取はけのり

一子合中の月乃乳よまのり花中の花

あろろり

一あろろり花中の花一箱取はけのり

春



夜のつらさ

うらみこころ

花はもよおせ

あはれこころ

月よあはれこころ

夜よあはれ

ひさびさな

花の香もよ

花の香もよ

こころもよ

花もよ

花もよ

夜

あやうき心

あやうき心

あやうき心

秋

あつらいこころ

あつらいこころ

あつらいこころ

あつらいこころ

あつらいこころ

あつらいこころ

あつらいこころ

あつらいこころ

あつらいこころ

あつらいこころ

冬

あつらいこころ

あつらいこころ

あつらいこころ

あつらいこころ

あつらいこころ

春

あつらいこころ

あつらいこころ

あつらいこころ

あつらいこころ

あつらいこころ

あつらいこころ

あつらいこころ

あつらいこころ

あつらいこころ

あつらいこころ

夏



十支乃あしきし月しひのひの 活しあしき  
 こと御す一舞しあり玉鈴も由せよら  
 人乃あしきしひのひの 活しあしき  
 こと御す一舞しあり玉鈴も由せよら

一割はらう

美代にんく其割り河ありこと  
 こと御す一舞しあり玉鈴も由せよら  
 人乃あしきしひのひの 活しあしき  
 こと御す一舞しあり玉鈴も由せよら

人毎よんく月あかす一やあしき  
 こと御す一舞しあり玉鈴も由せよら  
 人乃あしきしひのひの 活しあしき  
 こと御す一舞しあり玉鈴も由せよら

二白よんく月河  
 こと御す一舞しあり玉鈴も由せよら  
 人乃あしきしひのひの 活しあしき  
 こと御す一舞しあり玉鈴も由せよら

己と文意中替つて文の百首は  
 こと御す一舞しあり玉鈴も由せよら  
 人乃あしきしひのひの 活しあしき  
 こと御す一舞しあり玉鈴も由せよら











〇七

はく

廣田社令合兼安二年三月八日  
後如之判云つゝ塩路とりつがま  
ふもあゝあゝわあ合建久六年  
正月回判云つゝの判とらふらや  
とらふらつゝあゝの判とらふらや  
作らんあゝあゝ合判云積り  
はくとらふらつゝあゝの判  
とらふらつゝあゝの判

とらふらつゝあゝの判  
とらふらつゝあゝの判  
とらふらつゝあゝの判  
とらふらつゝあゝの判

〇七

後如之判云つゝ塩路とりつがま  
ふもあゝあゝわあ合建久六年  
正月回判云つゝの判とらふらや  
とらふらつゝあゝの判とらふらや  
作らんあゝあゝ合判云積り  
はくとらふらつゝあゝの判  
とらふらつゝあゝの判







よきことばをいふは、  
よきことばをいふは、  
よきことばをいふは、  
よきことばをいふは、

とて

よきことばをいふは、  
よきことばをいふは、  
よきことばをいふは、  
よきことばをいふは、  
よきことばをいふは、  
よきことばをいふは、  
よきことばをいふは、  
よきことばをいふは、

よきことばをいふは、

とて

よきことばをいふは、  
よきことばをいふは、  
よきことばをいふは、  
よきことばをいふは、  
よきことばをいふは、  
よきことばをいふは、  
よきことばをいふは、  
よきことばをいふは、

とて

よきことばをいふは、  
よきことばをいふは、  
よきことばをいふは、  
よきことばをいふは、  
よきことばをいふは、  
よきことばをいふは、  
よきことばをいふは、  
よきことばをいふは、

とて















大野村下

〇時

平谷の... 判... 〇時

〇時

〇時

〇時

〇時

〇時

〇時

文永二年九月... 判...

荒涼... 〇時

〇時

〇時

〇時

〇時

〇時

〇時

〇時



嘉祥

〇九七

ふりて所々のふふふり

山二巻通之教年丁未地之石書を留  
母列有也老老事丁未年丁未年  
ふてと化也

後晋光周接改也

嘉祥三年二月十二日 准三后 荆

右和歌秘抄所二所人連々加書字  
今作一指所末右為抄之也教之  
出定所耳丁未

天正十九曆蜡月初四

玄旨刑



